

【祇園会】

祇園会の山路に入るや大津籠
 京を下に見るや祇園の多ひもせず
 祇園会のけふによき名や心太
 祇園会や神のまにまに手向山
 祇園会や神代も聞かず今の京
 祇園会や京は日傘の下を行く
 祇園会や人をもる燈の薄ごころも
 祇園会やこれほどの人むさからず
 祇園会や真葛が原の風かほる
 祇園会や僧の訪ひよる梶が許
 祇園会や空もかざりて雲の峰
 祇園会やつかふ扇も山おろし
 祇園会や似げなき児の花紅葉
 祇園会や人の人中月出づる
 祇園会やまことの山はかんこどり
 祇園会やとほ濁りせる京の空
 祇園会の人中にて人恋し
 祇園会の団扇を持ちてすたすと
 祇園会の団扇もろうてまた歩く
 祇園会や我も洛中図のひとり
 祇園会と聞くだに熱くなる思ひ
 祇園会や出番来し山大路へと
 祇園会や一生懸命山担ぐ
 祇園会や銚より山に親しみて
 祇園会の松はるばると若狭より
 祇園会や清めの雨の荒々と
 祇園会やうすがき着たるたもとほり
 祇園会や神々ここに群がり来
 祇園会も最後の銚の過ぎし音
 祇園会その明け方の豪雨かな
 祇園会は少年の日の祭かな
 祇園会やおそろしいほど京は晴れ

宗因
 同
 道彦
 如貞
 吐月
 蓼太
 同
 鶴英
 蕪村
 同
 六柿
 洗市
 北橋
 一草
 如本
 飴山實
 武藤紀子
 近藤沙羅
 小川もも子
 飛岡光枝
 佐々木まき
 木下洋子
 同
 同
 本橋康子
 中村汀
 川村玲子
 伊藤昭子
 田宮尚樹
 諏訪いほり
 東一爽
 三玉一郎

祇園会や真松の空晴れわたり
 祇園会や大き日除けの乳母車
 祇園会や迷子めいたる田舎者
 祇園会や真白き句帳おろさんと
 祇園会の人を吐きだす電車かな
 祇園会の人にたぢろく老いしかな
 今年かざり今年かざりと祇園会へ
 祇園会や深閑として京都御所
 祇園会や古き名句のにぎはへる
 祇園会や今年はしづか東山
 孫を得て迎ふ祇園会ことのほか
 祇園会や輝いてゐる京男
 祇園会やしうねき暑き存分に
 祇園会の昔を語る京の人

【祇園祭】

とにかくに祇園祭の暑さかな
 コロナ禍の今こそ祇園祭かな
 大声で祇園祭の彼を呼ぶ
 グエン・ヴー・クイン・ニュー

梅田恵美子
 宮本みさ子
 同
 谷村和華子
 澤田美那子
 同
 同
 北側松太
 越智淳子
 同
 水室葉胡
 山田洋
 花井淳
 木下風民
 木下洋子
 同
 近藤沙羅
 山田寿美子
 山田洋
 伊藤昭子
 長谷川權
 土佐欣也
 福林幸代
 同
 澤田美那子
 中野津久夫
 佐々木まき
 同

鉾祭晴れたることを言ひ合へる
 海山の神やすらかに鉾祭
 鉾祭先ふれのごと燕とふ
 見たがりの子規にみせばや鉾祭
 越の人相模の人や鉾祭
 鴨川のあばれてをるや鉾祭
 兵児帯に結ぶ櫛や鉾祭
 この国の厄払はばや鉾祭
 打ち水のみる間に乾き鉾祭
 真つ青な竹切り出して鉾祭
 汗みづくなるがうれしき鉾祭
 小夜ふけて名残りの笛や鉾祭
 一泊の京の夜遊び鉾祭
 しんがり引く荷車も鉾祭
 荒ぶれる山河鎮まれ鉾祭
 降る雨は降るに任せよ鉾祭
 古棕がざりと納め鉾祭
 降るもよし晴れてなほよし鉾祭
 人垣に其角もゐたり鉾祭
 京中の虫干ならん鉾祭

【前祭】

射干や静かにをはる前祭
 【後祭】
 夏惜しむ心しみじみ後祭
 けふからは違ふ暑さや後祭

【體祭】

中賈の声のきおへる體祭
 骨切のこつにぎやかに體祭
 體祭をはつてからが體の旬

【鉾立】

鉾立の固めの槌の響きけり
 ゆさゆさと幣を揺らして鉾立てり
 鉾建や真木は大路塞きたる

山田寿美子
 同
 近藤沙羅
 同
 同
 岩根壽美
 角野京子
 山田菫草
 酒井きよみ
 北側松太
 飛岡光枝
 安藤久美
 稲垣雄二
 同
 坂元初男
 石川桃瑪
 同
 三木紀幸
 木下洋子
 長谷川權
 上田忠雄
 上田忠雄
 藤英樹
 上田忠雄
 飴山實
 同
 澤田美那子
 同
 長谷川浩子
 太田芳男
 植田房子

銚建や切られて開く繩の先	同	素戔嗚の力をかりて銚立てむ	上田悦子	仰向けて長刀銚を起しけり	長谷川權
つぎつぎと銚立ちあがる夏の月	同	銚建や繩結ふ人の玉の汗	同	長刀を揺るがせて銚起しけり	同
みしみしと音たてて銚立ちあがる	近藤沙羅	疫の世やしんかんと銚立ち上る	飛岡光枝	【山建】	長谷川權
ゆさゆさと繩を揺らし銚立てり	同	〇しも幣をゆはへて銚立つる	横山幸子	山建てや松揺れながら町の空	宮本みさ子
高きより繩ひとひら銚立てり	同	銚建や散らかる繩も二年ぶり	同	一本の松を力に銚立てり	同
銚立や新繩のよき香りして	本橋康子	青空に塩撒いて銚立てにけり	木下洋子	【銚蔵】銚倉	同
銚建ての巻くや結ぶや二本繩	同	銚立の繩の切れはし貫ひけり	同	銚倉を開く祇園の祭かな	太田芳男
銚建やまだ濡れてゐる繩の葉	同	銚立つて銚に命の宿りけり	齋藤嘉子	銚の蔵がらんとなりて涼しさよ	本橋康子
さしみつつ長刀銚は建ち上がり	山田寿美子	銚建てて真木に命宿りけり	齋藤嘉子	銚蔵や壁に立てかけ大車輪	中村汀
銚建や真白き御幣散らしつつ	同	次の世は男に生まれ銚建てん	辻奈央子	銚倉をあげよ今年の風入れん	齋藤嘉子
銚立つや涼しき風のまた来たる	小川もも子	かうしてはをられぬけふは銚立ぞ	中村汀	銚倉へ水一塊運びこみ	山本華子
銚立や荒繩道にどかと置き	同	ふくいくと香る新繩銚立てり	酒井きよみ	銚倉に手枕をして三尺寝	同
次々と銚立ちあがる大路かな	真鍋倭文字	次々と空のまほらへ銚建ちぬ	玉置陽子	銚蔵に眠れるままや木と繩と	氷室葉胡
長刀をゆらして銚の立ちあがり	太田芳男	銚立つや天地まぐはふ真柱	長谷川權	【銚頭】	同
慈雨ならん銚建の繩よくしまり	同	銚の中の長刀銚や立ちにけり	同	雲ふれんばかりに揺れて銚頭	川村玲子
銚建や花背の繩はこばれて	中村汀	町ぢゆうに銚立つ雨の晴間かな	同	朝の日や錦でつつむ銚頭	中村汀
銚建つる蘇民将来子孫とぞ	同	銚立や背にかけて繩ひきしぼり	同	立ち上がり日輪の辺へ銚頭	同
而して銚立ちにけり今年また	藪本文子	銚立や繩の切屑ちらばれる	同	【銚柱】真柱	同
繩一本ゆるりと銚は立ちにけり	澤田美那子	炎天に銚を建てねばならぬかな	同	錦まくやうに繩まく銚柱	岩根壽美
銚建やかはらぬ手順今年又	同	炎天や銚次々と建ち上がる	同	寝かされて龍のごとしや銚柱	安藤久美
芳しき新繩締めて銚立ちぬ	岡田忠孝	銚建つや諸国の美田青々と	同	銚柱揺れて洛中揺れにけり	山田寿美子
行きずりの人も綱取り銚立ちぬ	鎌倉英二	長刀を振りてよき銚立ちにけり	同	むくむくと夜の雲湧き銚柱	北側松太
銚建や平針に繩通しては	清田喜代子	三日月をかかげよき銚立ちにけり	同	ゆふしでの榭涼しや銚柱	長谷川權
銚立や頭に巻いて豆絞り	山本華子	立ちならぶ銚をよろこび燕とぶ	同	花つけし榭をさはに銚柱	同
飴色の木槌かるがる銚立つる	同	【銚組む】	同	立たざれば独活の大木銚柱	同
ずたずたの世に銚立てん山立てん	安藤久美	かるやかな木槌の音や銚を組む	田中政子	【銚の車輪】	同
銚立や長刀銚に始まりぬ	氷室葉胡	百丈の繩の束据へ銚を組む	田宮尚樹	金色の銚の名ゆゆし大車輪	山田寿美子
東山きれいな空に銚立ちぬ	上田忠雄	銚組むや繩もて繩をしごきつつ	中村汀	さめやらぬ銚の車輪の外さるる	花井淳
ふたとせの思ひの銚を建てにけり	同	銚組むや大槌の音ひびかせて	同	【銚飾】	同
山銚を建ててほんまの京の夏	坂元初男	なほ女人禁制の銚組み上がる	氷室葉胡	樟脳の匂ひ幽かや銚飾	深沢孝位
ひっそりと銚建つ年や祇園さん	花井淳	銚を組むとりどりの繩躍らせて	福田弘子	まだ青き薫もて銚を飾りけり	小川もも子
巡行の出番無けれど建つる銚	氷室葉胡	組み上げし銚を抜けては雀飛ぶ	長谷川權	胴懸けの瀑布のごとく懸かりけり	中村汀
銚立や安堵歡喜の顔揃へ	同	【銚起す】	同	【銚の宿】	同

振舞茶台点用意や鉾の宿

【鉾人形】

鉾人形奥の蔵より出してきし

【神輿洗】

神輿洗ひ大松明が先づゆけり

雷の囃せる神輿洗ひかな

吾も受く神輿洗ひの一筆

加茂の水飛ばして神輿洗ひけり

鳴神を祓ひて神輿洗ひかな

しづき上げ神輿洗ひの大櫛

大松明清めし路を神輿ゆく

腹巻に櫛をさして神輿担く

神の魂神輿に移す真暗がり

神輿洗お先太鼓を打ち鳴らし

神輿洗ひ水ふりかかるとうれしさよ

【神輿】

須佐之男の神輿荒ぶる炎暑かな

素戔鳴尊といへる神輿ぶり

鈴鳴つて神がかりゆく神輿ぶり

おみこしにほいとほいととついでゆく

須佐之男命こかすな神輿ぶり

【裸鉾】

ひと雨を浴びて清しや裸鉾

まつさらな縄の匂へり裸鉾

長刀鉾まだ裸なる大路かな

縄の香をまとひて涼し裸鉾

新縄の切り口熱し裸鉾

裸鉾はうきの音の清やかに

勇み立つ縄の薫りや裸鉾

一風呂を浴びしごとくに裸鉾

だんだんに息づいてきし裸鉾

薫縄の香り放つや裸鉾

花散りし大樹の如し裸鉾

木下洋子

木下洋子

木下洋子

木下洋子

同

本橋康子

同

上松美智子

山本華子

長谷川浩子

真鍋倭文子

中西幸雄

清田喜代子

澤田美那子

同

萬燈ゆき

長谷川權

同

同

同

同

同

植田房子

岩根壽美

小川もも子

上田忠雄

安藤久美

同

川辺酸模

木下洋子

辻奈央子

花井淳

上田忠雄

美しきトルソー立てり裸鉾

新縄で締めてすがしや裸鉾

きりきりと縄で締めあげ裸鉾

【鷺舞】

夕涼や羽をひろげて鷺の舞

眦に紅の涼しき鷺の舞

【曳初め】

船鉾に一雨ありてお曳初め

曳初めや鉾より鉾を囃しては

吾も今綱持つ一人お曳初め

祇園会の鉾曳き初めの園児かな

曳き初めの綱を握るも縁かな

曳初めの女子どもも底力

【鉾町】

鉾町に育ちし人を姑に持ち

鉾町の生まれと言ひて気丈なり

鉾町や梅雨夕焼のその中に

鉾の町献燈当番貼つてあり

鉾町の誇りの空の粽かな

匂ひたつ櫛横たへ鉾の町

鉾町に嫁ぎてともす祭の灯

鉾町の大路小路や日が暮るる

鉾の町山の町とて歩きゆく

鉾町といふ乾坤のにぎやかな

家苞の掛香選るや鉾の町

鉾町に生まれて鉾の奴かな

【鉾粽】 厄除粽

鉾粽稲穂一すぢ混じりたる

鉾粽笹うつるなるをかしさよ

花背よりとどきし笹や鉾粽

いざ子らや鉾の粽を売りたまへ

三方に束ねては立つ鉾粽

北山の杉の穂を挿し鉾粽

越智淳子

長谷川權

同

秋枝雪子

澤田美那子

山本華子

上田忠雄

大塚直子

水室葉胡

木下洋子

上田悦子

中村汀

同

同

同

同

木下洋子

上松美智子

山田寿美子

同

同

同

唐振昌

山田堂草

長谷川權

本橋康子

中村汀

丹野麻衣子

同

岩根壽美

同

同

同

祇園会の厄除粽家苞に

鉾の子の腰にさしたる粽かな

なにもかも閉じ込め岩戸粽かな

けさ秋やおくどさんにも鉾粽

鉾粽家にいちばんよきところ

赤ん坊を抱いて祭の粽受く

畏みて我が家にかかぐ鉾粽

母のため夫のための鉾粽

鉾粽求むマスクの人の列

早々と売切れ御免鉾粽

今年また恃む虚ろの鉾粽

結びあげて指芳しや鉾粽

たれかれに今年も買はむ鉾粽

子どもらの唄は無けれど鉾粽

わが家を守りて古ぶ鉾粽

我が小さき厨守りぬ鉾粽

ふたとせの厄祓はんと鉾粽

祭より帰りに飾る鉾粽

手に受けて香りなつかし鉾粽

鉾ちまき掛けんきのふの懐かしや

百の母いよよ長寿を鉾粽

枯れ枯れて風より軽し鉾粽

もう一年我が家を守れ古粽

景気よしかかへていくつ鉾粽

笹の香や蘇民将来粽買ふ

誇らかに山一番の粽売る

まだ残る笹の香りや鉾粽

三つ買へば三つそれぞれの鉾粽

長刀鉾のちまきで守れ門の口

祇園会の粽の香る句会かな

一年の無事を納めん古粽

うつけみの鉾の粽の涼しさよ

加茂の母鉾の粽の笹を刈る

菽本文子

近藤沙羅

上田忠雄

山田寿美子

藤原智子

諏訪いほり

同

齋藤嘉子

木下洋子

梅田恵美子

安藤久美

同

同

飛岡光枝

同

同

曾根崇

小川もも子

同

同

稲垣雄二

同

同

上松美智子

同

澤田美那子

横井初恵

石川桃瑪

北島正和

同

同

上田悦子

長谷川權

同

銚粽なか虚ろなりつれなしや
かさこそと鳴るや去年の銚粽

一年の塵からからと古粽

銚粽昔の家の香りかな

我が家の神の宿りて古粽

【祇園囃子】

銚処々に夕風そよぐ囃子かな
鱧料る祇園囃の音の中

祇園囃子豆腐の水にひびきけり
京にゐて祇園囃子のただ中に

地下街も祇園囃子や冷奴

祇園囃子はかなげにまた絢爛に
遠く聞く祇園囃子のはかなしや

けふの宿祇園囃子のただ中に
かんかんと照りゐる祇園囃子かな

地下街も祇園囃子の流れけり

憂き身にも祇園囃子のひびきけり

香を買ふ祇園囃子を遠ざかり

昼寝覚はるかに祇園囃子かな

包丁で合ひの手入れん銚囃子

夢に聞く祇園囃子や籠枕

籠枕なごりの祇園囃子かな

胎内で祇園囃子を聞きしこと

旅人の背中へ祇園囃子かな

奈落まで聞こゆる祇園囃子かな

小夜ふけて聞き入る祇園囃子かな

はかなしと聞き入る祇園囃子かな

青田風祇園囃子のわたりゆく

【銚囃子】

祖父打ちし銚孫も打つ銚囃子

夜は夜の音色となりて銚囃子

心急ぐ四条烏丸銚囃子

囃子方尻を揺らして銚の縁

同

同

きたりえこ

木下洋子

飛岡光枝

大祇

清水芳朗

田中政子

植田房子

木下洋子

唐振昌

山田寿美子

大谷弘至

北側松太

井上次雄

西澤麻

齋藤真知子

同

越智淳子

上田忠雄

同

水室茉莉

山田洋

同

同

長谷川權

同

佐々木まき

山田寿美子

角野京子

水室茉莉

炎天にすらりと立てて銚囃す
三年の昼寝から覚め銚囃子

由良川の鮎も都へ銚囃子

銚囃子蕪村の家も遠からず

銚囃子田楽をどりさながらに

田草とる手にも響くや銚囃子

雨だれも銚の囃子を奏でけり

【二階囃子】

夕立の中なる二階囃子かな

遠雷や二階囃子のたけなはに

こいさんもくはへて二階囃子かな

招かれて二階囃子のただ中に

【こんちきちん】

友人の下宿にて聞くコンチキチン

今年またひとりを悼みこんちきちん

コンチキチン金魚の水のゆれにけり

地下鉄は地の底深くこんちきちん

昼間から鱧の落してこんちきちん

荒梅雨の底とよもせやコンチキチン

コンチキチン鳴らぬ京都の暑さかな

七月の京は朱色やコンチキチン

水槽の鱧が鱧囃むこんちきちん

二番目に好きな銚来るこんちきちん

こんちきちんこんちきちんと氷水

銚出会ふこんちきちんと囃しては

こんちきちん煮ゆるがごとき京都かな

鴨川の鰻も浮かれコンチキチン

【銚の笛】

戦なき世に生まれきて祭笛

滅びゆく世界しづかに銚の鉦

風流の鉦や太鼓やよいやさ

はればれと打ち納めけり銚の鉦

大谷弘至

飛岡光枝

長谷川權

同

同

同

同

清水芳朗

中村汀

唐振昌

上田忠雄

平尾福

飛岡光枝

同

澤田美那子

同

齋藤嘉子

齋藤真知子

坂元初男

同

安藤久美

沙海悠

長谷川權

同

稲垣雄二

齋藤真知子

木下洋子

きたりえこ

中村汀

京都汗まみれ鉦の音鳴り止まず
肩上げの浴衣少年銚の鉦

打ち打ちていつせいに止む銚の鉦

前後に分かれて涼し鉦の銚

銚の鉦この世あはれと叩きけり

【鉦の房】

鉦の房コンキチンと飛びはねて

【戻り囃子】

はるかより戻り囃子の鐘の音

【銚の稚児】

かしこくも羯鼓字びぬ銚の児

うす痘の見えずていとし銚の児

銚に出た児によんべの夢問はん

目ふたいで銚下りにけり稚の親

我子にて候へあれにほこの稚

銚の稚児見据ゑてをりぬ東山

左右よりなさるるままに銚の稚児

銚の稚児扇ぐ大きな団扇かな

銚の稚児扇のかげに休みある

銚の稚児金の袂をひるがへし

かんばせのまことに白し銚の稚児

銚の稚児強力の背にけなげなり

かつがれて銚に乗る稚児尊しや

長刀銚稚児の瑤珞ゆれどほし

むかし稚児いまは笛吹く囃子方

かつがれし稚児ふりむくや銚梯子

恙なく注連繩断つや銚の稚児

銚稚児の上がりて梯子外しけり

舞ふやうに注連切つて銚の稚児

級友にはげまされゐる銚の稚児

炎天に花と舞ひでて銚の稚児

銚の稚児花より白く化粧して

身に余る刀抜いたり銚の稚児

三玉一郎

飛岡光枝

長谷川權

同

同

古志溢子

近藤沙羅

召波

几重

比松

大魯

大江丸

本橋康子

同

近藤沙羅

同

秋枝雪子

山本華子

上松美智子

坂口和子

坂元初男

中西幸雄

同

清田喜代子

上田悦子

田宮尚樹

大谷弘至

上田悦子

佐々木まき

同

同

上の子のけふは尊き銚の稚児
強力に稚児さらはれて銚の上
冠の黄金ゆるるや銚の稚児

【銚の笠】

今年また出番なかりし銚の笠

【生稚児】

生稚児の身を投げ出すやあなかしこ

生稚児の凛々しく舞を納めけり

生稚児に仕へてをりぬ大団扇

魂鎮めたまへ生稚児羯鼓打つ

強力の肩に生稚児大朝日

生稚児の舞ふや人形さながらに

生稚児を煽げや煽げ金扇

生稚児や人形よりもはかなげに

生稚児の舞ふや錦の風の中

灼熱の世へ生稚児の降りて来つ

生稚児の少年の夏終りけり

生稚児よよき夫となれ父となれ

生稚児に切られて舞ふや花の綱

まぼろしの生稚児みゆる銚の上

銚おりる生稚児を待つ夏休み

涼しさや高きにござる稚児の顔

生稚児やさぞや冠あつからん

生稚児は口引き結ぶ暑さかな

強力の肩に大輪花の稚児

生稚児にはるかなるかな銚の道

生稚児の母美しく控へをり

生稚児の今宵は母のふところ

生稚児もやがては人となるあはれ

生稚児の左右双子の禿かな

生稚児は水蜜桃の匂ひして

生稚児の今は香屋の主かな

生ちごや命あるもの麗しく

中村汀

長谷川權

高角みつこ

木下洋子

石塚純子

大場梅子

山根雪

諏訪いほり

石川桃瑠

川村玲子

趙栄順

大谷弘至

上田忠雄

田村史生

同

稲垣雄二

同

上田悦子

同

辻奈央子

近藤沙羅

安藤久美

坂元初男

澤田美那子

同

藤英樹

同

木下洋子

きたりえこ

長谷川權

同

【銚の禿】

兄弟と生まれて銚の禿かな

賀茂茄子のやうな御顔の禿かな

【稚児人形】

稚児人形身をのり出して舞ひはじむ

稚児人形がたりと揺れて目覚むらむ

命なき稚児人形の涼しさよ

【宵山】

宵山や入り日まばゆき唐錦

宵山や草の匂ひの瓜供へ

宵山や子供が売れる恋の護符

宵山や粽おひとつどうどすか

宵山や押されてのぼる銚梯子

しびれ京へのぼれやけふは宵山ぞ

宵山や大丸前で待ち合はせ

宵山や駒形提灯花のごと

宵山や鷹の屏風を見にゆかん

宵山の高張一つ休み山

宵山の鉦の音こそ涼しけれ

宵山や外郎売りの口上も

宵山の人波夜に入りけり

宵山の山の灯れり涼

紫蘇もみし指そのままに宵山へ

宵山の灯に寝入りたる東山

宵山にすこしてれつつ帰省かな

宵山や糸屋格子の中にあて

宵山の襖の雨となりにけり

宵山や歩き歩きて涼みけり

宵山の地べたに座る青春よ

宵山の一夜の浴衣掛けてあり

胡瓜漬一本かぢり宵山へ

宵山や人とはぐれて人の中

宵山や団扇で我を呼ぶは誰

佐々木まき

藤英樹

石川桃瑠

同

長谷川權

収芋

岩根壽美

同

同

中村汀

同

山田寿美子

本橋康子

同

田宮尚樹

佐々木まき

大場梅子

山本華子

原田耕治

横山幸子

鎌倉英二

夏井通江

角野京子

水室茉莉

越智淳子

稲垣雄二

同

木下洋子

同

同

大丸で涼んではまた宵山へ

宵山や光琳百花図踊り出づ

宵山や古琴一つ置かれあり

なつかしや宵山の灯も会ふ人も

宵山のなにかし寺の灯に会ひぬ

お清めの一雨浴びて宵山へ

宵山の熱川風にさましけり

宵山や笛の初めはゆるやかに

宵山の一夜の髪を結びにけり

宵山の酔ひのたちまち寿

宵山や漫る歩きの手に団扇

宵山の茹であがりたる顔ばかり

【宵宵山】

鉦方の一人は子供宵宵山

【宵山詣】

願ぎごとはひとつ宵山詣かな

見上ぐれば紙垂降ることし宵の銚

【宵祭】

宵祭ちきりや町に仮寝して

屏風絵の千草吹かるる宵祭

先代の蟪蛄も出て宵まつり

宗達の秋草に風宵祭

早くから浪速の客や宵祭

南蛮寺跡を通りぬ宵祭

をどこなら笛方がよし宵祭

でで虫の香炉寂びたり宵祭

吉例の鮎菓子買はん宵祭

射干を活躍るきほひも宵祭

今年また琴を飾りぬ宵祭

水笛に水を足しけり宵祭

青笹に包む水餅も宵祭

秋草の小袖の揺れて宵祭

澤田美那子

近藤沙羅

同

安藤久美

同

越智淳子

神蛇広

稲垣雄二

田村史生

十佐欣哉

長谷川權

本橋康子

中村汀

佐々木まき

川村玲子

本橋康子

同

近藤沙羅

中村汀

同

安藤久美

同

岩根壽美

清田喜代子

飛岡光枝

同

同

同

同

同

同

同

同

銚次々もう飽いてゐる舞妓かな
長き長き夢よりめざめ銚動く
銚ゆきて大路のこれる真昼かな
紅や炎天をゆく銚の傘

泰平の地べたに坐して銚仰ぐ
風神雷神走り来りて銚囃す
雲割つて日よさしませ雨を銚

全共闘闘士なりしも銚のひと
えんやらやえんやらやとや一生すぐ

【祭銚】
祭銚こぼれんばかり人乗せて
祭銚夏まで曳いてゆきにけり
祭銚都大路をほしいます
恍惚と雨しづくせり祭銚

【曳山】
曳山や姿よき松引き当てし
曳き山の松高々と吹かれけり
曳き山の松はこの世のものならず

【銚提灯】
馴初は銚提灯の小路とや
大丸の銚の提灯すだれかな

【籤改め】
少年に籤改めは大仕事
進み出て籤改へ美少年

【銚廻し】
銚廻し見んと人垣十重二十重
音頭取扇ひらりと銚回す
雅とも雄々しとも銚回しけり
男衆心一つに銚回す
どよめきや御池通りへ銚廻る
太き綱体に巻いて銚廻す
洛中をとよもし銚を廻しけり

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

銚廻すお囃子方も身をよぢり
ふんだんに水打ち据えて銚回す
銚廻す竹散り水散る上にかな
銚廻るささらの音もあはれなり
水の上また水打つて銚廻す
雨の銚水打たずとも廻りけり
雨の銚こんなに軽く廻るとは
降りやまぬ雨を力に銚廻す
でで虫の力も借りて銚廻す
かたくなに廻らぬ銚を廻しけり
ますらをに生れて銚を回さんと
加勢して五百羅漢や銚廻す
須佐之男の機嫌の銚を廻しけり
銚廻し六十余州廻しけり
長刀銚扇の風に廻りけり

【辻廻し】
二ゆらぎ二ゆらぎ銚の辻廻し
銚の月大きく揺れて銚廻し
銚先の大きく揺れて辻廻し
屋根方のふんばりどころ辻廻し
水撒けよもつと囃せよ辻廻し
今一度長刀銚を辻廻し
玉の汗花と散らせて辻廻し
四斗樽水うちまけよ辻廻し

【銚の辻】
浴びせ打つ手桶の水や銚の辻
銚の辻一筋避けてかき水
【銚進む】
鉦房の揺れの揃ひて銚すすむ
よういやさ扇返せば銚すすむ
雷鳴のとどろく中を銚進む
銚進む都大路に塩打ちて
朝の日や木の音たてて銚進む

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

山根雪
井上次雄
藤井洋子
藤英樹
同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

音頭取返す扇に銚進む
見送りは富士や孔雀や銚すすむ
須佐之男の力を借りて銚進む
神となり仏となりて銚すすむ
この年は心の中を銚進む
幾方の団扇の風に銚進む
おそろしきこの世の果へ銚進む
銚通るまこと金剛大車輪
ゆりの木の青葉の中を銚進む
黄金の国の都を銚すすむ
大水も地震もものは銚すすむ
三日月を花とかかげて銚すすむ
地より湧く炎の中を銚すすむ

【銚巡行】
銚巡行までは静かな京の朝
【銚曳く】
寿銚ひく人も見る人も
箱舟のごとくに銚の曳かれゆく
炎天の辻より銚を曳き出す
塗笠のみなきらきらと銚を曳く
炎天を揺らしては銚曳き廻す
銚を曳く笠の下なる玉の汗
白足袋の熱しと銚を曳くことよ
銚曳きの草鞋ちぎれて花の塵
イタリアの婿来て銚を曳きにけり

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

井上次雄
安藤久美
大谷弘至
同
稲垣雄二
辻奈央子
上田忠雄
澤田美那子
角野京子
長谷川權

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

同
同
同
同
同
同
同
同

男の子らの銚曳きまはす祭かな
笠を着て猿も兎も銚を曳く
洛中を銚曳きまはす遊びせん

【銚通る】

大丸の孔雀のまへを銚とほる
開け放つ二階の前を銚とほる
銚の後しづかに山の通りけり

【銚動く】

銚動く大き車を軋ませて
昨日まで立ちゐし銚のみな動く
大綱を声高らかに銚動く
人々の願ひ重たし銚軋む
氷水あちこちに銚動くかな

【銚来る】

天に熱地に熱いよよ銚来たる
颯爽と銚来て止る団扇かな
銚めぐりくるに間のある麦茶かな

【銚とぎる】

巡行の銚のとぎるる暑さかな
次々と銚とどこほる暑さかな

【銚の列】

八坂まで一目千両銚の列
炎帝の力のかぎり銚の列

【銚の道】

辻といふ難所ありけり銚の道
注連縄を切つて銚道開きけり
肅々と八坂へつづく銚の道
大水のあとの酷暑や銚の道
銚の道絹の道より続きけん
銚の道富貴の家の並びけり
雲の峰はるかに銚の道はあり
銚の道ちよつとはづれて未富に
恐るべき未来へつづく銚の道

同

同

同

萬燈ゆき

同

山田寿美子

斎藤真知子

田宮尚樹

坂元初男

福田弘子

長谷川權

大谷弘至

上田忠雄

植田房子

橋詰育子

横山幸子

上松美智子

同

清田喜代子

同

趙栄順

木下洋子

稲垣雄二

長谷川權

同

同

同

【銚を待つ】

大辻はいよよざ降り銚を待つ
【銚の奴】銚の衆

銚の衆今年揃ひのマスクセリ

銚衆に氷室の氷差し入れよ

我もまた銚の奴といふべしや

ここに又銚の奴や松選ひ

銚陰にひと休みして銚の衆

銚衆のどやしどやされ銚立ちぬ

【銚団扇】

銚車大きく描かれたる団扇

音頭取金の団扇の裏は銀

もみくちやの宵山をゆく団扇かな

句の縁かりそめならず銚団扇

生稚児に絶えずまゐらす団扇風

おそろしき恋かもしらぬ団扇かな

【長刀銚】

人を待つ長刀銚の立つところ

長刀銚ひとつ揺らぎて動き出づ

高々と長刀銚をとんぼとぶ

長刀銚飛行機雲のすぐそばに

長刀銚命の綱の見え隠れ

長刀銚廻り切つたるところかな

長刀銚しなひて天をわたりゆく

まほろばや長刀銚の立ち上る

長刀銚千年万年囃すべく

狂ほしく長刀銚を追うてゆく

我もまた長刀銚につき行かん

切り進む長刀銚や京の空

鳩舞ふや長刀銚の空青く

仮の世の長刀銚に登りけり

上がることかなはぬ長刀銚仰ぐ

長刀銚すつくと雨を打ち払ふ

大谷弘至

佐々木まき

横井初恵

唐振昌

中村汀

山田寿美子

田村史生

本橋康子

趙栄順

上田悦子

中村汀

井上次雄

上田忠雄

原田耕治

萬燈ゆき

横山幸子

清田喜代子

山根雪

橋詰育子

藤原智子

諏訪いほり

同

同

小川もも子

井上次雄

佐々木まき

山田虫草

金澤道子

阪ひとし

まさしくや長刀背負ふ長刀銚

長刀銚俳諧の鬼これにあり

長刀銚見えそめしよりはるけしや

誇り高き長刀銚や動かさざる

長刀銚今年の出水手強いぞ

今年また長刀銚にまみえけり

疫を切る長刀銚の太刀いづこ

長刀銚この世の厄を払ひつつ

白玉や長刀銚がすぐそこを

長刀銚睨みきかせて立ち上がる

長刀銚建ちて恐るるものはなし

まほろしの長刀銚来る大路かな

長刀銚深く息して動き出づ

長刀銚立ちて大路を払ひけり

長刀銚蕪村住みにし町を往く

長刀銚豊穰の雨浴びながら

長刀銚長刀ゆらし大路来よ

長刀銚雲のひとつも寄せつけず

長刀銚少し傾く暑さかな

時は今長刀銚の立ち上がる

長刀銚青青と空を揺らしけり

こちらと長刀銚へ渡る橋

長刀銚熱気に銚の縄ゆるぶ

長刀の光こぼしつ銚立てり

遠さかるほどに大きな長刀銚

息を吹きかへし長刀銚は立つ

長刀銚さざ降りの中やつて来る

朝風の晴れがましきや長刀銚

長刀銚富士より高く聳えけり

山は富士銚は長刀こんちまちゃん

正面に炎のごとし長刀銚

仰ぎ見む長刀銚は雲の中

いま過ぎてはるかかなたへ長刀銚

東一爽

大谷弘至

澤田美那子

同

斎藤真知子

同

木下洋子

同

同

同

同

同

小川もも子

近藤沙羅

同

同

田村史生

同

安藤久美

谷村和華子

氷室茉莉

同

花井淳

三五一郎

辻奈央子

山田洋

上松美智子

上田忠雄

同

東一爽

玉置陽子

三五一郎

月鉾やふりさけ見れば東山
 月鉾をまことの月の照らしめる
 月鉾の月ひらひらと炎天に
 月鉾を仰ぎて君も月の人
 月鉾や月の宿りて花やかな
 月鉾やまひるまの月浴びながら
 鴨川の河童も曳くや月の鉾

同 同 同 同 同 同 同
 齋藤真知子
 近藤沙羅
 中村汀
 同 同
 山根雪
 清田喜代子
 上松美智子
 田村史生
 同
 上松美智子
 高角みつこ
 澤田美那子
 木下洋子
 安藤久美
 角野京子
 同
 長谷川權

したたるや菊水鉾の菊の露
 菊水鉾菊の雫を滴らす
 菊水鉾われにもくれよひと雫
 金色の菊したたるや菊水鉾
 菊水鉾早の空に花開く
 菊水鉾孔雀を瀧と垂らしけり
 菊水鉾ゆらりと菊の姿かな
 いっせいに白きからかさ傘菊水鉾

諏訪いほり
 藤英樹
 橋詰育子
 飛岡光枝
 同
 長谷川權
 同
 同
 安藤久美
 上松美智子
 横井初恵
 藤英樹
 長谷川權
 本橋康子
 同
 岩根壽美
 中村汀
 同
 伊藤昭子
 植田房子
 横山幸子
 澤田美那子
 同
 三玉一郎
 氷室菜胡
 古志溢子
 横山幸子
 長谷川權
 同
 同

その人に芦刈山のよき句あり
 賤の男の話きかせよ芦刈山
 一切は夢と思へど芦刈山
 【蠶螂山】
 飛ぶ翅のみどり美し蠶螂山
 蠶螂山鎌振り上げて喜ばれ
 新しき胴懸けうれし蠶螂山
 蠶螂山頭もたげて翅ひろげ
 蠶螂山なごりの羽をひろげたり
 蠶螂山けふはかまきり機嫌よき
 蠶螂山今宵は翅を休めをり
 蠶螂は山の行く手を蔽ひつつ
 蠶螂山さても夜風に飛びさうな
 炎天にかつと見ひらき蠶螂山
 鉦祭青田の色の蠶螂山
 蠶螂山ただならぬ世に羽広ぐ
 蠶螂山斧に鬨志のあるごとく
 はばたいて暑さを払ふ蠶螂山
 蠶螂山三年ぶりに羽広げ
 蠶螂山金のまなこに雲の峰
 蠶螂の広げぬ翅へお風入れ
 見送りの翅涼しけれ蠶螂山
 蠶螂山蠶螂どこへ飛びゆきし
 京女一番好きは蠶螂山
 羽休め無聊をかこつ蠶螂山
 愛想よく蠶螂山の来たりけり
 蠶螂山山一番と羽広げ
 蠶螂山声かけられて右左
 よろこびの翅をばたばた蠶螂山
 蠶螂山また千年を青々と
 赤ん坊の立つて喜ぶ蠶螂山
 【木賊山】
 ものがたり聞けば哀しや木賊山

同 同 同
 同
 本橋康子
 木下洋子
 中村汀
 堀野英子
 丹野麻衣子
 横山幸子
 坂口和子
 角野京子
 石川桃瑪
 伊藤昭子
 石塚純子
 藤英樹
 佐々木まき
 上田忠雄
 安藤久美
 田村史生
 上田悦子
 花井淳
 齋藤真知子
 上松美智子
 同
 三玉一郎
 飛岡光枝
 辻奈央子
 山田洋
 坂元初男
 長谷川權
 本橋康子

あをあをと木賊植ふたり木賊山 四五人の男が立つる木賊山 木賊山この世の木賊一束 老いて待つ二年は長し木賊山 訪ね来て浮世の外れ木賊山 淋しさの果てにありけり木賊山	近藤沙羅 岩根壽美 丹野麻衣子 澤田美那子 上田忠雄 山田洋	護摩を焚く煙の中から行者山 【太子山】 押し立てて比叡の杉や太子山 あをあをと杉の若木や太子山 子の授くる知恵の守りや太子山 世にひびく錫杖の音太子山	木下洋子 本橋康子 同 木下洋子 飛岡光枝	綾傘鉾さても涼しき調べかな 綾傘鉾飛天の蹠涼しかり 清水さん惚ぶ綾傘踊見て 鉾次々綾傘鉾を待つところ 綾傘鉾傘の紅顔染めて 綾傘鉾ひよいと抱へて廻しけり	藤英樹 近藤沙羅 佐々木まき 安藤久美 飛岡光枝 長谷川權
【岩戸山】 岩戸山近江の松を美しく この先の道のくらがり岩戸山 高々と鉾にも似たり岩戸山 石持に石さくさくと岩戸山 生も死も同じ暗闇岩戸山 うつつて出んこの世の闇へ岩戸山 くら闇をくだく太鼓や岩戸山	佐々木まき 岩根壽美 本橋康子 上田忠雄 同 上田悦子 同	【保昌山】 保昌山見送りてまた会ひにけり 妻愛すこともたいへん保昌山 ひそと買ふ保昌山の恋みくじ 保昌山恋の粽の軽きこと 君に買ふ保昌山の粽かな 梅一枝愛しき人へ保昌山 保昌山恋の力で動きけり	上田忠雄 藤英樹 夏井通江 稲垣雄二 きりさこ 長谷川權 同	【山伏山】 法螺貝に山伏山の動き出つ 【笛方】 兄弟のいづれ笛方太鼓方 【戻り鉾】戻り山 戻り鉾二つ並びてはしけやし また一つ雨の中より戻り鉾 はるかより戻り囃子の鉦の音 業平の館の跡を戻り鉾 笛方のひとりひた吹く戻り鉾 鉦町の路地いつばいに戻り鉾 ひとまはり大きくなつて戻り鉾 ゆのし屋の庇の前を戻り鉾 戻り鉾戸口に椅子を持ち出して 戻り鉾こぼしてとほりゆく 大車輪目の前をゆく戻り鉾 戻り鉾風のごとく過ぎゆけり 稚児舞の身をのり出すや戻り鉾 誰彼に手を振りゆくや戻り鉾 戻り鉾団扇の風に送られて 柵屋の黒塀の前鉾戻る 見下ろして畏れ多くも戻り鉾 洛中の厄を集めて戻り鉾 軋みつつ軒の上くる戻り鉾 屋根方は足で捌いて鉾戻る	飛岡光枝 飛岡光枝 飛岡光枝 飛岡光枝 飛岡光枝 近藤沙羅 飛岡光枝
【孟宗山】 あらためて亡き父母偲ぶ孟宗山 孟宗山雪おく松を炎天に 孟宗山の雪のかけらが飛んで来し 炎天の雪を香らせ孟宗山 この暑さ孟宗山の雪浴びん うだる世へ雪を一掻き孟宗山 孟宗山松に真夏の雪つもる	太田芳男 藤英樹 横山幸子 澤田美那子 上田悦子 安藤久美 長谷川權	【霰天神山】 霰天神松の緑の美しく 霰天神山粽かけばや軒先に 【黒主山】 茄子かぼちや黒主山と彫られあり 仰ぎみる桜のよけれ黒主山 善人の顔して涼し黒主山 山老番黒主山へ大かぼちや	佐々木まき 坂元初男 大場梅子 上松美智子 上田悦子 飛岡光枝	【占出山】 安産の山が一番占出山 占出山祝ひの鮎をいただかん 生むが安し山一番の占出山	同 同 同 同 同 同
【鯉山】 鯉山の鯉跳ねてゐる暑さかな 雲の峰鯉山の鯉はねながら 鯉山の鯉は炎の風に跳ね 鯉山や鯉を誇りの男ぶり 鯉山の鯉となりたき暑さかな 鯉山の大きな鯉や滝上る 鯉山の鯉のぼりゆく虚空かな	本橋康子 木下洋子 坂元初男 石川桃瑪 上田忠雄 横井初恵 上田悦子	【鈴鹿山】 鈴鹿山人が担ひて曳きまはす 【南観音山】 あばれきて南観音山涼し 軒蹴つて南観音山あばれたり 昨夜あばれ南観音山静か	唐振昌 丹野麻衣子 上田忠雄 角野京子	上松美智子 潮伸子 上松美智子 同 本谷厚子 秋枝雪子 清田喜代子 角野京子 澤田美那子	同 同 同 同 同 同 同 同 同
【八幡山】 八幡山鳩の鈴音よくとほり	馬淵可奈	【綾傘鉾】綾傘踊			
【行者山】					

新町の角をまはつて戻り鉾

山鉾のもどりきつたるあとの風

戻り鉾空から松をおろしけり

もどり鉾からくれなゐの尾を引いて

放浪の果ての姿の鉾帰る

夏深き京の奥へ鉾帰る

ぬかるみし昔もあらん戻り鉾

古き良き新町通り戻り鉾

新町へよろけて入る戻り鉾

すみたればさつさと戻り囃子かな

【休み鉾】

お囃子の稽古絶やさず休み鉾

鷹山の翁さびたり鷹もまた

禁門の変やこの方休み鉾

休み鉾今こそ力蓄へん

力溜めよ今年こそぞりて休み鉾

天空に月を預けて鉾休む

応仁の乱にあらねど休み鉾

【鉾解き】

たちまちに長刀鉾の解かれゆく

鉾解きて涼しき縄を貫ひけり

力あはせ鉾の車輪をはつしをり

今頃は鉾解かれをる頃ならん

鉾解いて急に明るき京の空

二階より指示の声とび鉾を解く

函谷鉾解きたる縄のうづたかく

鉾解かれ普段の町に戻りけり

なにもかも解かれ横たふ真木かな

夏深く今年の鉾を解きにけり

鉾解いてあすより盆の支度せん

外されて鉾の車輪の大いなる

【祭】

かりそめの祭提灯も侘し

木下洋子

大谷弘至

丹野麻衣子

玉置陽子

上田忠雄

同

飛岡光枝

横山幸子

岡田忠孝

長谷川權

大塚直子

丹野麻衣子

北側松太

安藤久美

稲垣雄二

澤田美那子

飛岡光枝

小川もも子

同

近藤沙羅

同

中村汀

清田喜代子

安藤久美

井上次雄

酒井きよみ

上田忠雄

藤英樹

長谷川權

佐々木まき

祭なき都大路をぶらぶらと

【祭髪】

一本のガラスの花を祭髪

夕顔の花ほぐれてや祭髪

【夏】

町中が手持ちぶたさや京の夏

御霊会や京は静かに夏の底

月が揺れ長刀が揺れ古都は夏

水色の菓子子の包みも夏らしく

【夏菓子】

これがかの京の夏菓子笹の露

【梅雨】

荒梅雨やあばれ観音閉じこめて

【喜雨】

喜雨浴びて曳子は声をいや高く

【炎天】

大車輪さら打ち敷く炎天下

炎天やまんじりともせず大車輪

炎天の男美し鉾の上

【土用】

土用餅黒き頭を並べたる

【台風】

台風や夫の大傘借りてゆく

台風一過祇園句会のうれしさよ

【雲の峰】

いや高く上がる真木や雲の峰

汀さんの祇園歳時記雲の峰

京都御所木立の奥の雲の峰

【夏の月】

めでたけれ京に二つの夏の月

【流星】

星飛んで今宵親しき東山

【暑し】

長谷川權

飛岡光枝

長谷川權

稲垣雄二

澤田美那子

三木紀幸

長谷川權

佐々木まき

上田悦子

安藤久美

佐々木まき

上田悦子

安藤久美

佐々木まき

飛岡光枝

長谷川權

長谷川權

木下洋子

坂元初男

岩根壽美

飛岡光枝

長谷川權

齋藤嘉子

山田寿美子

齋藤嘉子

山田寿美子

齋藤嘉子

山田寿美子

山田寿美子

山田寿美子

山田寿美子

山田寿美子

山田寿美子

屋根方のさぞ暑からん命綱

【涼し】

京の菓子名も涼しさの水室かな

鬼どもの涼んであるや京の闇

茅の香の涼しやこそ御旅所

琴ひとつその他一切涼しけれ

涼しさの草鞋の足の過ぎゆけり

菊の露の養ふ命涼しかり

笛の音の笛を飛び去る涼しさよ

長刀鉾一本立てて涼しけれ

白玉の顔を並べて夕涼み

【暑気払ひ】

一心に俳句作るも暑気払

【夏祓】

西国にのたうつ龍を夏祓

【汗】

曳方の玉の汗こそ尊しや

玉の汗蘇民将来の子孫なり

【髪洗ふ】

宵宮の人にもまれし髪洗ふ

【土用】

京にゐて土用に入りぬ土用餅

荒々と土用鰻を八幡巻

【打水】

打水や奥に奥ある京の家

水打つて鉾町の闇鎮めたり

水打つて奥までつづく京の家

賀茂の水打つ一杓に鬼は散る

屋根方や天のまほろに水を打つ

【川床】

川床で飲む名も鴨川や冷し酒

【簞】

川風や二間つづきの簞

田宮尚樹

上田忠雄

安藤久美

同

中村汀

横山幸子

木下洋子

長谷川權

同

同

同

木下洋子

長谷川權

長谷川權

佐々木まき

長谷川權

飛岡光枝

長谷川權

同

長谷川權

同

長谷川權

同

佐々木まき

稲垣雄二

安藤久美

同

上田悦子

上田悦子

上田悦子

上田悦子

上田悦子

上田悦子

【鱧】

鱧食うて棒ふりばやし見にゆかん
落し鱧喰はねばころ定まらず

大谷弘至

青笹をはらりととけば水饅頭

玉置陽子

仕付けとらず銚の浴衣も二年に
巡行は無けれど一日銚浴衣

澤田美那子

鱧を焼く匂ひまとふや門提灯
切り落とす鱧の眼の涼しかり

丹野麻衣子
越智淳子

【葛饅頭】
岩倉の笹の青さよ葛饅頭

岩根壽美

棒切れの手足がぬつと銚浴衣
月一字染める浴衣や腰に笹

同

鱧茶漬京の一日を冷ますべく
疫の世も鱧の骨切り威勢よく

齋藤真知子
川辺酸模

【かき氷】
うるはしき宇治のみどりかき氷
屋根方にかちわり氷振る舞はん

佐々木まき
坂元初男

夕風に吊られしままの浴衣かな
今日だけは男あがめて浴衣ぬふ

齋藤真知子
辻奈央子

とびきりの大輪なりき牡丹鱧
べつびんの鱧の花咲く椀の中

木下洋子
飛岡光枝

【心太】
鴨川を啜るこちや心太

上田忠雄

宵山のこの日のための浴衣かな
銚の縁浴衣の尻を並べたる

夏井通江
長谷川權

祭鱧食べずに一つ年取るか
鱧の花氷の上におかれけり

稲垣雄二
同

【葛焼】
葛焼に白雨のすじの二三本

長谷川權

浴衣きて一夜の花の娘かな
ラグビーの少年らしき浴衣かな

同

包丁の一閃ありて鱧の花
鱧切つて三日三晩の暑さかな

上田忠雄
同

【射干】
射干のうしろ坪庭しんとあり
射干のうしろ誰が袖屏風なる

山本華子
中村汀

父母の愛かぎりなく藍浴衣
一筆で描くへうたんの浴衣かな

同

涼しさを器に鱧の落しかな
宵山やからりと揚がる鱧の骨

同
上田悦子

檜扇や家の玄関仄暗く
檜扇が咲けば祇園会みにゆかん

近藤沙羅
清田喜代子

【羅】
羅や美しけれど知らぬ人
羅の執念き人とみゆれども

同

鱧焼いて京の祭を始めけり
さくさくと鱧切る音や荒格子

同
同

【桔梗】
笹ゆりも桔梗の花も舞妓かな

稲垣雄二

【羅】
素戔嗚尊や令和二年の大昼寝

同

湯引かれて鱧は真白き花となる
鱧食うて今日一日は京の人

横井初恵
三木紀幸

【茄子】
水茄子の一本漬や京暑し

長谷川權

【簾】
鴨川へ茶屋は簾を並べけり

きたりえこ

巡行を寿ほぐはものおとしかな
包丁や花と開きて鱧の骨

同
同

妻留守の茄子の輪切りの一夜漬

本谷厚子
土佐欣哉

【葭障子】
葭障子越しに眺めて昔めく

同

鱧喰うて何やはかなころかな
熱湯の地獄に鱧を落しけり

長谷川權
同

【胡瓜】
銚嚙子聞いて太りぬ大胡瓜

横山幸子

【団扇】
沈黙す稚児あふぐべき大団扇

近藤沙羅

座敷ごと冷してありぬ落し鱧
目も鼻もなく涼しき鮎の菓子

同
同

【瓜】
冷し瓜みやこの水に冷されて

伊藤昭子

この雨の上れば別れ団扇かな
長刀の長の一字を団扇かな

同

焼鮎や丹波の道は石ばかり
【鮎】

飛岡光枝
長谷川權

【夏帽子】
夏帽子香を商ふ店に入る

澤田美那子

【蚊遣香】
須佐之男も宵寝するらん蚊遣香

同

浅き桶涼しくうねる鰻かな
【水羊羹】

長谷川權

【浴衣】
横町の老いも若きも銚浴衣

佐々木まき

かなかなの心に沁むや京の夕

澤田美那子

【水饅頭】

飛岡光枝

【夕立】

同

上松美智子

三日月の手拭ひを添へ水羊羹

飛岡光枝

浴衣の子ならびて粽どうじすか

梅田恵美子

【夕立】

上松美智子

大夕立三十六騎みなふるふ

安藤久美

【涼し】

神在すほの暗闇の涼しさよ

長谷川權

【蟬】

油蟬真木の松にとまりけり

上田悦子

【扇】

太陽と月を扇の裏表

長谷川權